

上総掘りの井戸を訪ねる

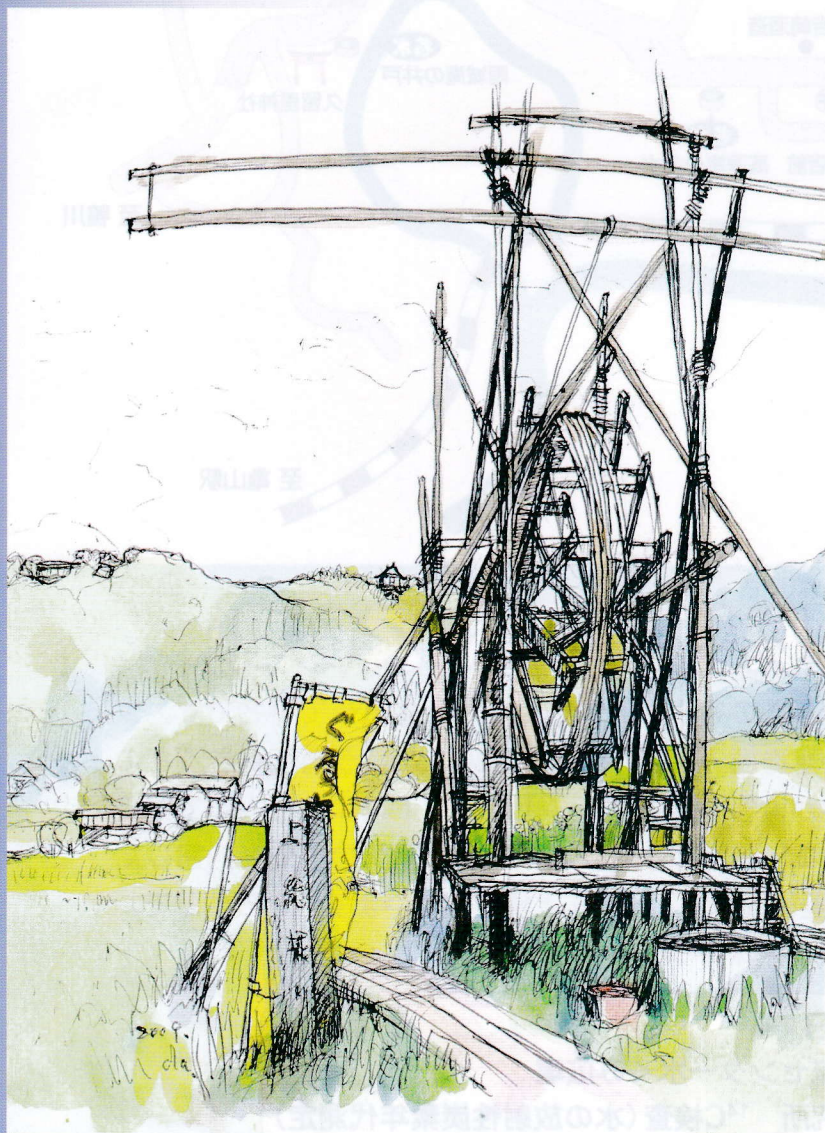
君津市周辺では地下水が自噴する地質構造があり、昔ながらの上総掘りによる自噴井戸は、君津市内に1,200本程が確認されています。久留里周辺ではそのうち188本が確認されています。

上総地方に、突掘りによる井戸掘りの技術が伝わったのは、古い記録によると、19世紀の初め頃のことです。これは大阪方面を中心として発達していた突掘りの技術が、各地に伝播した時期にあたります。この頃の突掘り法は、鉄棒を吊り下げておき、垂直に落下させてその自重で孔底を突き抜いていくものでした。その後、この技術に工夫・改良が加えられ、明治14～15年頃には、鉄棒の代わりに樫棒を利用し、掘り屑浚渫用の竹筒のスイコを用いる突掘り法が考案されました。


明治19年頃には、竹ヒゴ、掘鉄管、スイコの組み合わせによる掘削技術が考案され、明治26～27年頃には、竹ヒゴを巻き取るヒゴ車も発明されて、ここに裸孔のままの掘削を可能にするネバミス（粘土水）の利用などと一体となった井戸掘りの技術体系が成立しました。「上総掘り」とは、この竹ヒゴ式突掘り技術が高度に発達した段階の技術体系をいいます。

久留里市場地区で、掘り抜きの深井戸が掘られたのは明治26年のことで、以後次々に掘られていきました。元井戸から水を分配した共同利用の「余水井戸」も、家々が密集していた久留里ならではの特徴です。現在でも新町の通りに残されています。

上総掘りが生まれた背景には、「米作りのための水が足りない」という事情がありました。しかし、城下町として栄えた久留里市場地区には町場の様々な機能があり、それぞれに水を必要としたため、多くの井戸が残されることになったのです。酒造りもその一つであり、久留里の周辺だけで5つの蔵元があります。さらに、井戸水を利用した高級魚「ホンモロコ」の養殖も新たに始まり、久留里の味になりつつあります。



水汲みのマナー 駐車は迷惑にならぬよう

制作／上総ロータリークラブ 
参考資料／君津市立久留里城址資料館